

平成二十九年一月二十一日(土) 午前九時始

福岡市中央区大濠公園一―五

於 大濠公園能樂堂

電話 ○九二―七―五―二―五五番

二十周年記念

季風会大会

主催

季風会

入場 無料
御来会 歓迎

ご挨拶

皆様にはお健やかに過ごしの事と拝察申し上げます。

この度、季風会二十周年を迎えるにあたり、

恩師 柿原崇志師をはじめ、人間国宝 梅若玄祥師、

片山九郎右衛門師、日頃お世話になっております諸先生方のお力添えを賜わり、季風会大会を催させていただきました。

この機会に、河口久美様には能「松風^{見留}」を、

田中美恵子様には能「菊慈童^{遊舞之樂}」をお勤めいただきます。

また会員の皆様方にもそれぞれお稽古の成果をご披露いただきます。

皆様におかれましては、ご知友お誘い合わせの上、

一日ごゆるりとお楽しみいただければと存じます。

たくさんの方々のご来場を賜わりますよう、ご案内申し上げます。

白坂 信行

番組

笠之段

山口剛一郎

幸市川 太祐
正佳

相原 一彦

久保誠一郎
小田切康陽
森本哲郎
今村一夫

玉之段

藤田 涉
横山 幸彦

森田 徳和

山口剛一郎
田茂井廣道
小田切康陽
味方團

猩々

久保誠一郎

幸坂井 英彦
正佳

相田中 達

山口剛一郎
赤瀬雅則
今村嘉伸
味方團

雲雀山 (喜多流)

野上 理恵
横山 幸彦

森田 徳和

狩野 祐一
狩野 了一
渡辺 康喜

船弁慶

赤瀬 雅則

石浦 誠之
成田 達志

相原 一彦

久保誠一郎
今村嘉伸
多久島利之
森本哲郎

融

味方 團

坂田 一男
幸正佳

吉谷 潔
相原 一彦

久保誠一郎
森本哲郎
多久島利之
今村一夫

安宅

小田切康陽

河野真紀子
成田 達志

松田 弘之

山口剛一郎
味方玄
片山九郎右衛門
田茂井廣道

田(喜多流)

村

山本 友晴
横山 幸彦

相原 一彦

狩野 祐一
狩野 了一
渡辺 康喜

野(金春流)

宮

松井 笙子

白坂 信行
幸佳 正佳

松田 弘之

地謡
川上フミ子
川上ハル工

永芳 孝子
福田 京子
寺崎 満喜

忠(喜多流)

度

益田まもり
横山 幸彦

松田 弘之

狩野 祐一
狩野 了一
渡辺 康喜

遊行柳

青柳之舞

片山九郎右衛門

江原 育男
成田 達志

田中 達
森田 徳和

小田切康陽
赤瀬 雅則
梅若 玄祥
森本 哲郎

十二時半頃

能(観世流)

村雨 田茂井廣道

松風 味方 玄

松風

見留

旅僧 御厨 誠吾

浦人 野村 万禄

大鼓 河口 久美
小鼓 成田 達志

笛 松田 弘之

後見

小田切康陽
赤瀬 雅則

地謡

久保誠一郎 多久島利之
今村 一夫 梅若 玄祥
味方 團 片山九郎右衛門

番外一調

(喜多流)

蝉丸

狩野 了一

柿原 光博

草子洗小町

森本 哲郎

小原九州男
横山 幸彦

相原 一彦

山口剛一郎
赤瀬 雅則
今村 嘉伸
今村 一夫

隅田川

新谷 朋子
横山 幸彦

松田 弘之

小田切康陽
多久島利之
梅若 玄祥
赤瀬 雅則

三輪

今村 一夫

松尾 弥生
成田 達志

吉谷 潔
森田 徳和

久保誠一郎
味方 玄
片山九郎右衛門
味方 團

(喜多流)

春日龍神

丸田美和子
幸 正佳

吉谷 潔
森田 徳和

狩野 祐一
狩野 了一
渡辺 康喜

放下僧

多久島利之

高見 幸雄
横山 幸彦

相原 一彦

今村 一夫
今村 嘉伸
片山九郎右衛門
味方 團

番外一調

景清

前

今村 嘉伸

柿原 崇志

能 (観世流)

菊慈童

慈童 梅若 玄祥

遊舞之樂 後見 御厨 誠吾

勅使 坂苗 融

大鼓 田中美恵子 小鼓 幸 正佳 大鼓 田中 達 笛 森田 徳和

後見 小田切康陽 赤瀬 雅則

地謡 山口剛一郎 味方 玄 今村 一夫 多久島利之 田茂井廣道 片山九郎右衛門 森本 哲郎 今村 嘉伸

【能「松風」のあらすじ】

旅の僧が摂津国(兵庫県)須磨の浦を訪れると、訳ありげな一本の松がありました。旅の僧は浦に住む者に松の謂れを尋ねます。

それは松風・村雨の姉妹の旧跡である聞き、跡を弔い、塩屋に宿を借りようとします。月の美しいその夜、二人の海女が汐汲み車を引きながら夜景をめでて塩屋に帰ってきました。僧が宿を頼み松風、村雨を弔つたことを話すと、涙ながらに自分たちはその姉妹の霊であることを明かし、行平との思い出を語ります。姉、松風は形見の烏帽子と狩衣を身にまとい、激しい恋慕の情にかられ、松に行平の姿を見、松を抱き舞い狂います。僧に弔いを頼むと二人は消え去り、僧の夢が覚めると辺りにはただ松風だけが吹いていました。

【能「菊慈童」のあらすじ】

所は中国、魏の文帝の頃のこと。麗縣山の麓より不思議な水が湧き出し、水上を訪ねてみよとの勅命を受けて、勅使が山に分け入ります。辿り着いた所は、菊の花の咲き乱れる仙境でした。そこに住む美しい少年は、なんと周の穆王の時代より七百年もの間老いることもなく生き続けていると言います。

穆王に賜った枕に記された法華経の二句の妙文を菊の葉に書き付け、菊に宿った露が、やがて不老不死の霊水となつて流れ出たと、少年は経文を讀え、楽しげに舞うのでした。枕を帝に捧げた少年は、菊を掻き分けて、その姿は消えて行きました。

大濠公園能楽堂の御案内



主催 季風会

白坂信行

〒811-3308

福岡県福津市星ヶ丘二六一一五

電話 〇九四〇一五二一五六一四